

シナリオ通りの初V

43歳から始めたゴルフ

3 アンダー、141

福留 洋一（高千穂）



つけ入る隙を与えなかった。首位に1打差、2位タイからスタートした最終日最終組。安定したゴルフが冴えわたる。アウトの9ホールは全てパーオン。この間、4番ロング（500ヤード）では残り235ヤードを5Wで2オンし、楽々のバーディーを奪い、8番ロング（495ヤード）でもバーディーを決めた。3パットのピンチもあったが、得意とするパットでしのぐ。後半の16番ロング（485ヤード）でもスコアを1つ縮めた。続く17番ミドル（436ヤード）ではミスが重なるも、最後はピンまで18ヤードを56度のウエッジで直接放り込んでのパー。ライバルたちは啞然とするしかなかった。

「びっくりしています。でき過ぎです。頑張っている姿を見せることができました」と言いながらも、勝つ自信を少なからず持っていた。と言うのも、昨年、このコースで行われた地元新聞社主催の大会で優勝。1カ月前にはゴルフ仲間の先輩からランニングアプローチの極意を伝授されたお陰で南九州CCの高麗芝にもうまく対応できた。さらに、最近ではホールをティーイングエリアからではなく、グリーンの方から攻略するようになったという。ショットが安定してきたから余裕も生まれ、考え方も変わった。大会が始まる前「ここは距離が短い（6559ヤード）ので2日間とも2アンダー、2アンダー」と踏んでいたのだが、3アンダーで回ったのだから、ほとんど福留の描いたシナリオ通りとなった。

都城西高時代は高校球児でポジションは捕手。ガッチリとした体つきからドライバーの平均飛距離は270ヤードを誇るのだが、それにも増して驚かされるのが、その強靱な体力と精神力だ。今年5月末頃、福留は球磨CC（熊本）でのプレー中に右足首を痛めた。その日は27ホールを回ったのだが、痛みが引かずに病院へ行くと、なんと骨折が判明。全治3カ月。その2週間後の6月15日には九州シニア選手権の鹿児島県予選があり、福留はギブスを外し、故障箇所をテーピングして5位で予選を通過した。今回の優勝は骨折から始まったサクセスストーリーである。



クラブを握ったのは大阪から生まれ故郷の都城市（宮崎）に戻った43歳からだ。友達に誘われて始めたのだが、半年後には競技ゴルフをスタートさせ、4年目にはシングルに。現在はキャディーなどのゴルフ関係の派遣業を生業としている。日本シニアには2年前に初めて出場したが、予選落ちした。「あの時はゴルフをさせてもらえなかった。今度はいい成績を残せるよう頑張りたい。今のうちに取りたいものです」とひそかに優勝を狙う。

《一言》

2位・小杉康之（熊本空港）「ノーボギーは良かった。バーディーチャンスが結構あったが、カップに蹴られたりしたけど、そういうこともある。まあまあ粘りのゴルフができた。自分の精一杯のゴルフをやれたし、2位なら十分。（優勝した福留が）69なら仕方ない。日本シニアには、もっとアイアンショットを磨いていきたい」（最終日71をマークし、通算オープンパーの144。昨年優勝し、今回勝っていれば、1986年から6連覇した野見山博以来の連覇となっていた）



最終日の平均スコア5・14と最も難しいホールとなった7番ミドル(411ヤード)。打ち下ろして上っていくハンディキャップ1の難関ホールだ



15番ショートの前にある看板。